



日本がコロナ禍に覆い尽くされて、もう2年半が経つ。ワクチンの登場でこの困難に終止符が打たれると皆が期待していたが、接種済もお構いなしの「ブレイクスルー感染」は、もはや珍しくもない身近なものになった。問題の長期化の影響は、医療や社会にとどまらない。俳壇において、「マスク」といえば冬の季語である。しかし、通年着用の現在においては季節が感じられず、歳時記から除かれ季語でなくなるかもしれないという。コロナ禍を過ぎれば、再び冬の季語たりうるとの声もあるものの、先日の新聞記事では、終息後もマスクを着け続けると答えた市民が4割にも上った。「元の暮らし」に戻るのではなく、「新たな暮らし」がこの先確実に始まるのだろう。

コロナ禍で生活は大きく変わった。常時のマスク着用と共に、ソーシャルディスタンスの確保が求められる。私たちはこれまで災害のたびに、家族や友人、同僚、近隣と、いつも「身を寄せ合い」乗り越えようとしてきた。豪雨がけたたましく屋根や壁を叩くなかで、もしくは街灯が消え暗く静まり返った景色のなかで、あの「AC ジャパン」の道徳的なコマーシャルを見ながら、災禍が通り過ぎ行くのを「傍で」互いに身を寄せ合い待ち続けた。しかし、コロナ禍はそれを許さないところがある。

取って代わるように、Zoomをはじめとする「遠隔」コミュニケーションツールの利用が一挙に拡大した。職場や学校において、当初の期待以上の力を発揮した。都心のオフィスを縮小する企業や、地方に移り住む社員も少なくないようだ。Web 授業・講義の評判も案外悪くない。

精神保健医療においても、オンライン会議システムの診療や相談への活用は非常に有用であった。アクセスの敷居が高いメンタルヘルス問題について、そのようなシステムの利用は相性がよい。早期相談・支援の窓口の1つとして、今後のさらなる拡充が望まれる。一方で、われわれが足立区内で実施している相談事業において、一旦リモートで相談を行った後に、「対面」の直接相談を改めて希望する援助希望者が案外多かったことは予想外であった。最新のオンライン会議システムで表情や動作がクリアに見られて、声も明瞭であっても、それでも多くの人が五感で相手を感じとり「身を寄せ合いたい」のだと思う。

一方で、コロナ禍の変化のなかで、日々の生活が精神的に楽になったと感じている人も少なくない。過剰な対人接触から、しばし解放されているからであろう。私たち人類は、ゴリラやオランウータンと異なり、際立つ「社交性(sociability)」をもつチンパンジーの流れを汲む。それがゆえに、地球の生態系の頂点に立った。コロナ禍は、人類最大の武器を封じられた状態といえる。人間であること自体が過剰な社交性を帯びているのだから、そのなかでより積極的に socialize (対人交流) することを求められるのは、考えてみれば非常に酷な話である。今ぐらいが丁度よいのだろうと、つくづく思うのである。森の賢者といわれるゴリラやオランウータンのように、静かに程よく身を寄せ合える時が訪れるのが待ち遠しい。

根本隆洋